

子どもへの がん教育

日本では、1981 年から、がんが死因の第一位を占め、さらに高齢化の進展を主な要因として、罹患者数・死亡者数ともに増加し続けており、国民の 2 人に 1 人が生涯のうちにがん罹患すると推計されています。

子どもにとっても、大切な家族が罹患するなど、がんが身近な問題となっています。がんの予防という観点からも、がんという疾患について子どもの頃から学び、また、がん患者への理解を深めていくことが重要です。

2012 年に見直されたがん対策推進基本計画に、「がんの教育・普及啓発」が初めて分野別施策として項目立てされ、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識を持つよう教育することを目指し、5 年以内に、学校での教育の在り方を含め、健康教育全体の中で『がん』教育をどのようにするべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」とされました。

これを受け、2013 年度に文部科学省補助事業として、日本学校保健会に、がんの教育に関する検討委員会が、翌 2014 年度には、文部科学省に「がん教育」の在り方に関する検討会が設置され、モデル校での実践も進められています。

がん教育については、教育と保健医療との緊密な連携が不可欠であることから、本特集では、文部科学省の取り組みを踏まえ、教育、保健、医療等様々な立場から、これからのがん教育について、どのような視点で取り組むべきか公衆衛生担当者向けに解説していただきました。



イラストレーション：ペドロ山下